鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース
第90号
2017年11月1日

発足から15年

社叢インストラクター・社叢見守り隊など 社叢学会の重要性高まる

社叢学会では、2002(平成14)年5月に賀茂御祖神社(京都市)で設立総会を開催して以来、早くも15周年を迎えた。

これまでの歩みを振り返ると、発足間もないといっても過言ではない３年目に国際博覧会である愛・地球博に出展参加という大事業を敢行。国内外に社叢という空間の心地よさ、奥深さを体感してもらうことができた。

また東日本大震災では、直後から被災地で社叢調査を重ね、いち早く防災拠点や被災後の地域コミュニティ再生の核としての社叢の重要性を指摘。現在、こうした活動を総括する書籍出版を目指し、事業を継続している。

こうした大事業に取り組む一方で、ほぼ毎月１回、関西・関東で開催している定例研究会は、社叢や森林が直面する問題や歴史、民俗学的アプローチなど多彩なテーマを、それぞれの分野の第1人者が最新の研究成果を発表する場となっている。さらに03(平成15)年からは、里山や人工林とは異なった管理が必要な社叢を適切に育成し、未来につなぐ役割を果たす社叢インストラクターの養成を開始。資格認定試験を経た社叢インストラクターを社叢管理の要請や相談を受けた社叢に派遣し、適正な管理に向けて管理計画の策定等を行っている。これに加え、昨年からは「社叢見守り隊」を発足させ、武蔵国(東京都・埼玉県・神奈川県)と神戸市西部で、市街地を中心に社叢の実態調査を始めている。

また、年に１回会開催される年次総会に併せた研究大会・シンポジウム・見学会では、社叢学会ならではの学際的な討論、普段はなかなか公開されない社寺の拝観などが評判を呼び、年々参加者が増加している。

昨今、パワースポットとして神社・社叢への関心は高まっているが、現実的に取り巻く環境は厳しさを増している。発足当初の理念を再確認するため、ここに設立の趣意書を掲げ、今後の活動への思いを新たにしたい。

趣　意　書

社叢は神社の森、すなわち「神々の森」である。当学会は鎮守の森を始めとする社寺林、塚の木立、ウタキなどについて、関連する諸学の垣根を取り払って調査研究を進め、地域に密着した新しい学問の創造と社叢の保存･開発をめざして設立されたものである。

かつて日本列島に住みついた人々が「神々の森」を創ったのは、厳しく、しかし美しいこの日本の自然を、ただ畏怖し、あるいは制御するだけでなく、積極的に共生しようと考えたからであった。そういう日本人の思想のシンボルとなり、かつ、行動の結節点となったものが、以後の社叢であり、そのなかには変わらぬ日本の自然が生き続けている。

そのありようは、今日の社叢についてもいえる。そこには、昔の植生、地域の動物、乱されない土壌を始め、神々の霊跡、遺跡、遺物、古建築、古植栽、古美術、古文書、史跡、名勝、天然記念物、さらにすぐれた景観、芸能、民俗行事、共同体組織、水利構造から村落配置、住民の生業や環境、文化の生成にいたるまで、有形、無形の多くの文化財が残されている。

そこで、この社叢を対象に、植物学、動物学、生態学、考古学、建築学、造園学、美学・美術史学、歴史学、民俗学、宗教学、農学、林学、水産学、法学、社会学、地理学、都市・国土計画学、土木工学、環境学、文化人類学等の諸学を結集してその解明を進めるならば、何百年、何千年にわたる日本人の変わらぬ思想や生活、環境、文化などを明らかにしうるとともに、今日、自らのアイデンティティを喪失しつつある多くの日本人に、自然を基軸とする日本文化にたいする深い自覚をうながし、大きな自信を与えることができる、また人々が社叢に関心をもつことによって、社叢の破壊をくいとめ、人々の生活環境に緑を恢復することができる、さらには地球環境の悪化に悩む世界の国々にたいしても、日本文明の発信のひとつとしての環境学的指針を提示することができる、と考えられる。

第76回関西定例研究会　報告

2017年7月29日
(於:伏見稲荷大社儀式殿)

「フロ」　今に残る杜の残像

講　師：西尾　良一（社叢学会市民会員）
ｺﾒﾝﾃｰﾀ：上田　萌子（大阪府立大学助教）

出雲は古来、神まつりの盛んな土地柄である。遺跡の踏査で山野に踏み入ると、時折「フロ」と呼ばれる信仰対象地(物)に出逢う。修験者の行場だろうと思っていたが、古墳や城址もあり、興味を持ち始めその正体や起源を考え始めた。

現実的には、県下の町村教育委員会や地区公民館などへフロと云って問い合わせると、温泉施設と間違えられることが茶飯事であり、存在が忘れ去られることを実感している。

研究史と語源　フロについては、1717(享保2)年編纂の地誌『雲陽誌』仁多郡石原村御崎森の項で、「里人御崎ふろという、世俗森をふろと号す」と記されている。また柳田国男も1915(大正4)年に「風呂の起源」を著している。

語源は、昔から多くにムロであると指摘されてきた。フロを「森」とするならば、風土記に多々見られる森は室やフロへと変化したであろうか。黒田祐一(松江高専教授：故人)は「モリ」について「島根県には神社の森を表す別の地名 にフロがある」(『ふれあい島根』7号・県民運動協議会平成3年3月刊)と指摘し、「フロ」については「森と同様に神に関係する地名。違い、使い分けは明確でない。ただ、フロの方が地名の意味がより意識されている」(同9号・平成4年3月刊)と述べている。

さらに『島根の地名(一)』松江高専研究紀要(人文)(28号平成5年刊)では、「森より意識的に使用される度合いが高い。以前は四方を囲まれた場所の意味で使用されていた。戸棚、貯蔵穴の方言として使用。神社の森も四方から区別された聖域空間として意識され呼ばれた」と踏み込んでいる。

島根県方言辞典でも「神社の森、氏神など神を祭ってある神社のこんもりした森」(広戸編・島根県方言学会・昭和38年)と記している。隣接する岡山県でも「美作、備中北部で、樹木の鬱蒼と茂った祭地をいい、聖地とされる。荒神、ミサキ」(三浦秀宥『岡山県民俗辞典』昭和50年)と社叢と認識している。

語彙集では「ミヤブロとも云い地名としてすこぶる多い。オムロ、ミムロなどとも共通で、広く神聖な森や叢地のことを指して用いられた」(民俗学研究所『綜合民俗語彙』平凡社・昭和45年)と場所(空間)を指摘しながらも、同じく社叢と解釈する。

神の籠る煮炊き場？　ただ、石上堅は「ムロと同じで籠る場所の意味がもとである。浴場も元は戸が閉めっ切りにもなり、「神の杜」をフロと呼ぶこととの関係が想像される。火焚きの労をまぬがれる、炭火の小さな置炉のように、忌み籠りに便利な火器をも風炉という。『日本民俗語大辞典』昭和58年4月)と閉鎖空間と初めて火器を想定している。このようにフロ＝社叢と短絡的に結びつけ難いものがある。

島根県多久町の「石風呂」などのように、森はなく神を祀る場所(磐座)のみの事例もある。ここは古墳時代から楯縫神名樋山の祭祀遺跡である。また日御碕に近い鷺浦に梅谷川の辺にミサキ風呂という巨岩を祀る場所もある。森より石神さまを信仰対象としている。このように祀る対象物にフロの名がついていること、立地も近くには川があるという例が多く、祭祀遺跡からは五徳の原型である土製支脚が出土する例が大半であることを考えると。フロの語源を森と固定するより、煮炊き場も想定した方がよりよいと推定される。神の籠るモリの中に限られた煮炊き場の空間あるのだ。

秘められた空間で煮沸を用いた祭祀を想像するのは困難ではない。現在、湯立神事は祭礼において重要な位置を占めている。加えて境内社として多く存在する釜社は火器としての風炉の存在を暗示している。今年度の総会の折に、古い大神神社境内図を拝見した。拝殿前に据えられた湯立の神事に使う鼎状の風炉が大きく描かれていた。三輪は古来より酒造りの神と称えられ、別名も見諸山と呼ばれていた。酒造りには湯を必要とすることを考えると、フロの用途も知れる。麹を入れる木箱、搗き立ての餅を入れる「モロフタ」、酒はモロミから醸すことなどを考え合わせると、ムロとフロとが醸造工程で密接な関係が見、錯誤したとも云えてくる。

かつて出雲の秋祭では一夜酒を醸した。森(荒神)の中に埋めた甕に麹と湯を入れ、一晩で酒を造り祭事に使用する。これらも、森のフロの発生に関りがあったと推測できる。また、グロと呼ばれるフロに近い祭祀跡もある。このグロにも「隠れる」という言葉と共に使われてきた。大田市五十猛町の小正月行事「とんどさん」では、グロと呼ばれる仮屋を浜辺に作って歳徳神を迎え、豊漁や無病息災を祈願した後、正月飾りと仮屋を焼き払う行事が残っている。

これに近い呼称でヒロがフロと訛って呼ばれる例も多い。近世末～近代に宮を遷宮し、旧社地をミヤヒロ(広)と呼んだものがミヤフロと訛っている。

急がれる記録採取　フロの原風景を考えると、森・杜から日常から遮られた区域をムロと云い、隠れる、籠る場所を指すグロが使われ、限られた区域は祭の場としてのヒロが生まれた。さらにムロからは秘匿された場所で行う湯立て神事や供献、酒宴の飲食物の炊飯に用いる火器が舶来の風炉に近い器だったことから、ハレの祭祀空間を呼称する名称のとなったと考えられる。いずれにせよ、過疎化の波で山中に「フロ」を尋ね知るのは我々の世代が最後だろう。多くの記録を書き、一つの神社形態を伝えて贈りたい。

第75回関東定例研究会　報告

2017年10月14日
（於　國學院大學）

ブナと社叢―東日本太平洋側を例として

講　師：原　正利（元千葉県立中央博物館生態環境研究部長）

ブナは落葉広葉樹で、日本の冷温帯を代表する樹木である。特に東日本の日本海側の多雪地では優占林を形成して、山腹から山麓にかけて広範囲に分布する。一方、雪の少ない太平洋側の地域では、諸山地の山頂部に優占林が点々と分布するが、その広がりは小さく、伐採など人為影響が強く及ぶ山腹・山麓にはほとんど見られない。これは元々、東日本の太平洋側においては、優占林の広がりが小さいことに加え、実生繁殖や萌芽によって再生することが稀で、伐採によって消失しやすいためである。太平洋側地域では、ブナはいわば希少価値であり、保全上の重要性が高い。

これまで北上山地や阿武隈山地、八溝山地など東日本太平洋側の山地を踏査してブナやブナ林の分布を調べてきた。その結果、これらの地域においても、自然性の高い森林の中には、たとえ低海抜地であっても、ブナが低密度ながら構成種として含まれている場合が多いことがわかってきた。これらの山地において、ブナの有無は森林の自然度や保全状態を測る一種の指標になると言える。

ブナを探して現地調査を行う中で、多くの神社を訪れることになり、神社の森が森林や生物多様性の保全に果たしてきた役割を改めて考える機会を得た。ブナの分布と神社の分布とは、何らかの関係がありそうである。社叢の植生に関する研究は数多くあり、社叢が自然度の高い極相性の森林の保全に役立ってきたことはよく知られている。しかしこれらの研究の大半は常緑広葉樹林帯でなされたもので、落葉広葉樹林帯の社叢の研究は少なく、社叢と森林保全の関係も十分に解明されたとは言えない。

景観上社叢は社殿を囲む島状の森の塊、パッチとして認識されることが多い。社叢がシイやカシなどの常緑広葉樹やスギ、ヒノキなどの常緑針葉樹によって構成される場合は、周辺の田畑や雑木林、住宅地とのコントラストが強い。どこまでが社叢か、その範囲は比較的、容易に認識できることが多い。一方社叢に多くの落葉広葉樹が混じる場合は、周辺の田園景観に溶け込んで、社叢の範囲は景観的には認識し難くなることがある。

また平地に比べて山間地では、社殿の背後がそのまま山へと続いていく場合が多く、この場合も景観的に社叢の範囲に区切ることが難しくなるように思う。生態系の機能という面から見ても、社殿周囲の森林は、その奥に位置する山の森林と一体のものとして扱った方が良い場合が多い。さらに、信仰面から見ても、山間地では修験道の影響が強いことが多く、この場合社叢は背後の山の自然と一体なものとして認識され、信仰の対象とされてきたのではないだろうか。

（文責・渡邊　節子）

見渡神社（福島県田村市大越町牧野）の社叢のブナ

次回予告【第73回関東定例研究会】

◆日　　時：１月２７日(土)　14：00～16：30
◆場　　所：國學院大學渋谷キャンパス120周年記念２号館１階　2104教室
（東京都渋谷区東4-10-28）（教室は変更の可能性あり）
◆テ ー マ：６本の年輪―被災後の福島県南相馬市から
◆講　　師：森　幸彦（山田神社(福島県南相馬市)宮司・福島県立博物館専門学芸員）

共催：國學院大學環境教育研究プロジェクト・ポーラ伝統文化振興財団　※上映映像未定

夏原グラント助成金

協力イベントを開催

大岩山で父活プロジェクトと

社叢学会は、地域活動団体である父活プロジェクトから協力を求められている大岩神社(伏見区)社叢管理に関連して、同団体が11日(土)に開催するイベント《大岩山で遊ぼう「鎮守(ちんじゅ)の森のたんけんたい「〇〇の木」をみつけよう！」》に講師として武田義明理事を、指導員として社叢インストラクターを派遣する。当日は、小学生以下の子供とその保護者10人程度が、鎮守の森について学び、散策する。

大岩神社社叢は、京都一周トレイルの、伏見挑山から伏見稲荷大社奥社へ向かうコースの終盤近くに位置し、昨今の荒廃が指摘されてきた。京都市でも豊富ではありながら活かされていない観光資源を広くPRしていきたい意向を示しており、本学会でも今後、地元住民と共に社叢管理・活用の方策を探っていきたい。

事務局から

● 今年度の会費未納の方には振替用紙を同封いたしました。何かと多端な折とは存じますが、社叢学会は会費で運営しております。ご理解とご協力をお願い申し上げます。なお、12月末日までに入金の確認ができなし場合は、「鎮守の森だより」等をお送りできなくなりますので、悪しからずご了承下さい。退会をご希望の場合は、会員番号とお名前をご記載の上、Fax・Mailでその旨、お知らせ下さい。

銀行振込も可能です。三菱東京UFJ銀行京都支店　普通口座6720345　特定非営利活動法人社叢学会　理事長　薗田稔　です。

● 下記の通り、『社叢学研究』16号への身近な活動報告と社叢を訪れた時の感想などを募集しています。「社叢訪問記」では、小さな発見、残念な思い、どんなことでも結構です。ぜひお寄せください。

編集後記

15年かぁ。。。いろんなことがあったなぁ。何といっても万博と震災ですかね、大事業は。実は、堅気のサラリーマン(今も堅気ダケド)時代に花の万博(90年・大阪)と阪神淡路大震災を経験し、花博では関連団体で広報を担当、阪神淡路では文化復興プロジェクトを手掛け、もうこんな経験はないだろうなぁと思いきや！　何と、たった一人の事務局で万博に出展するぅ!?　東北で未曾有の震災＋津波＋原発事故!?　よ～～く働かせていただきましたよっ、残業手当なんかなしで！　ブラックかっ?!　とはいえ目下ちょっとした狭間の余裕モード。と思っていると、あっとゆーまに怒涛の会誌編集に入るんだろ～な～。ひぃ。(藤岡　郁)

次回予告【第77回関西定例研究会】

◆日　　時：11月25日(土) 13：30～15：30
◆場　　所：伏見稲荷大社儀式殿（伏見区藪ノ内町68）
◆テ ー マ：鹿児島県指宿市におけるモイドン(森殿)の保全と住民意識
◆講　　師：上田　萌子（大阪府立大学助教）

原稿募集中！

「鎮守の森の活動報告」(祭、音楽会、調査、ワークショップなどの実施報告、抱える問題点など)や各地の「社叢訪問記」(各1,200字程度)の投稿締め切りは1月10日（水）です。

お気軽にご投稿ください！

＊ 書評欄では会員の皆さま方の著作を取り上げています。出版された方は、ぜひご献本下さい

発行人　社叢学会事務局　〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL075-212-2973　FAX075-212-2916
URL http://www.shasou.org　E-Mail　shasou@ams.odn.ne.jp
社叢学会関東支部　〒368-0041　秩父市番場町1－1　秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032　E-Mail　shasougakkai@hotmail.com